

『共笑（ともえ）なニッポンを目指して ～外国人と共に働く未来日本の介護の現場～』

日本は、団塊の世代が75歳以上になる2025年には、34万人の介護の人材が不足すると予想されている。その客観的な事実、既にはじまった未来とどう向き合うのかが、日本が抱えている最大の課題の一つである。前代未踏の課題解決に挑む日本から学ぼうと世界中が注目している。

日本の介護職員不足の課題解決に向け、中長期的にロボットなどの最先端の技術に期待を寄せる一方で、注目されているのは、外国人介護職員の活用である。日本において外国人介護職員の受け入れが既にはじまっており、成功している。今後に向けてもその活躍に期待されていると同時に、持続可能性に向けて乗り越えなければならない課題も現れている。

手前よし、相手よし、周りよしの「三方よし」の考え方が大切になってくる。つまり手前としての事業者や日本人スタッフがよし、相手としての海外からのスタッフもよし、そして周りとしての日本社会や外国スタッフの出身地や国もよしということが求められる。海外からの介護職員の受け入れは「セレンディピティ(偶然の幸運)」に満ちており、逆に言うとセレンディピティを求めることが求められる。

介護職における外国人雇用の展望、技能実習生、受け入れのメリット・デメリット、成功例、成功するための心構えなどと合わせてお話をいたします。